

---

# 降るなら綺麗な華がいい

小春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

降るなら綺麗な華がいい

### 【Nコード】

N2349L

### 【作者名】

小春

### 【あらすじ】

神社の娘である牡丹はある日突然異世界にひっぱられ『死者の国の王』になったと告げられました。

何もわからないまま、ひっぱりまわされ振り回される日々。そして、事件(?)が起きました。平穏な生活に戻りたいけど、痕跡を勝手に消され、後に引けない状況に追い込まれた女の子のお話です。

## 第一話 降るなら綺麗な花がいい

ザーザーザー

バケツをひっくり返したような、という表現がぴったりの突然の豪雨の中、一人の少女が神社へ伸びる長い石段を傘もささずに駆け上がっている。

少女だけではない、今、外を歩いている人のほとんどが傘をささず、足早に自分の目的地へと急いでいた。

雨を含んだ制服は肌に張り付き、ものすごく重たい。

これでは、カバンの中に入っている教科書やノートは見るも無残な姿になっているだろう。明日から夏休みということもあり、今日は午前中で学校は終わったので、持っている冊数が少ないのが救いかもしれない。

「・・・でも、現国の教科書はまた買わなくてはいけないですねえ。最後のにもつたいたないですう」

足にまとわりつくスカートがこのときばかりは邪魔でしょうがない。少女は1分1秒でも早く家に入り、熱いシャワーでもあびたかった。しかも、今日は久々に兄が帰ってくる日なのだ。

神社の宮司をしている父、巫女をしながら父の仕事を手伝っている母は兄が帰ってくるという話を聞いた日からウキウキとしていた。少女も何だかうれしかった。

少女の名前は、柳崎牡丹<sup>りゅうせきぼたん</sup>。この長い石段の上にある「竜心神社」の娘である。学校の成績は中の上あたり、運動神経はまあまあ。

かといって、選手に選ばれるでもなく、先頭に立って何かやるわけでもなく、いたって平凡に今まで生きてきた普通の女子高生である。

しかし、牡丹はある意味有名だった。

牡丹が、というわけではなく、正確には、牡丹の「兄」がであるが。

牡丹には6つはなれた兄がいる。

牡丹の兄、柳崎龍樹りゅうせき たつぎは、成績優秀、眉目秀麗、運動神経抜群。性格は一本筋が通っていて誰からも好かれる、いわゆる「完璧」な人だ。本来ならば家業を継ぐため神道系のある大学に入るべきところを、孤児院を併設しているから、小児科医の資格をもっていたほうが便利だし、神職の資格はあとからでもとれるからねえと爽やかに笑って、有名大学の医学部に現役合格、小児科救急の権威のもとで研修に勉強にと毎日忙しい日々を送っている。

そんな兄が牡丹には誇りだった。

まぶし過ぎてちよつと怖いときもあるけど。

父も母もやさしいが、兄は特別にかわいがってくれた。

そんなやさしくて居心地のいい家族が牡丹は大好きだ。

- たとえ、血はつながっていないなくとも -

自分にはないものをたくさん持っている優しい兄。

帰省するときは、必ずお土産をたくさん買ってきてくれたし、宿題も見てもらえた。最後の夏休みだから、牡丹は大学進学に向け、兄から苦手な英語を教えてもらう約束になっている。ただでさえ少ない休みを割いて勉強をみてもらうのだ。

そんなこんなで、自分も早く帰りたかったのに、突然のこの雨である。

「ついてないですう・・・」

牡丹はもう一度ため息をつく、ラストスパート！と自分をはげました。

あの鳥居をくぐれば、自宅でもある社務所までは、目と鼻の先である。

最後の石段を駆け上がったとき、牡丹は誰かに強く手を引かれたような気がした。

## 第一話 降るなら綺麗な花がいい（後書き）

初めて投稿させていただきまず、小春コハルと申します。

つたない文章ではございますが、精進していきますので、よろしく  
お願いいたします。

## 第二話 暖かい出会いとおいしいお茶

牡丹はゆっくりと瞬きをすると、両手で自分の頬を2回、3回たたいてみた。

「痛い……です……」

そして、周りを見わたす。

先ほどまでの豪雨も、赤い鳥居も長い階段も跡形もなく、見渡す限り一面の黄色い「蘇芳<sup>すおう</sup>」の花。

花はどこまでも続き、遠くの山にしずかに沈む夕日にキラキラと輝いていた。

甘い香りにさそわれてか、空中を蛍のような淡い光がふうわりとただよい、牡丹は時間がたつのも忘れていた。

ふと、制服が乾いていることに牡丹は首をかしげた。

乾いているというより、最初からぬれていなかったかのように皺もよれもなかった。

髪の毛もぬれていない。

あの雨は幻覚だったのだろうか？

それとも、この風景が幻覚なのだろうか？

「綺麗なお花畑……三途の川ってこんなところをいうのでしょうか……」

川はなかったが、あまりにも現実離れたこの光景をみてしまい、牡丹は気持ちを紛らわせようと努力してみた。

ごちゃごちゃといういろいろな考えが浮かんでは消え、また浮かぶ。

とりあえず、自分が来たであろう道を確認しようとして、後ろを振り返ろうとしたとたん、ごうっという音とともに、蘇芳の花をまきあげながら、牡丹の脇を強風が通り抜けた。

風が収まると、牡丹の姿はどこにもなく、何事もなかったかのように静かな時が流れているばかりだった。

「・・・おい、おい！ねえちゃん！大丈夫か？！」

頭上から降ってくる声に牡丹はわれにかえった。

「あ、だ・・・大丈夫ですう（多分）」

自分を見下ろしているのは15歳くらいの男の子。

人懐っこそうな笑みをうかべて、腰が抜けて動けない牡丹に手を差し出してくれた。

「いやあ、悪い冗談かと思っただぜ。こんな大通りのど真ん中でうずくまってるんだもんな。」

少年に言われて、牡丹は改めて周りをみわたした。

先ほどの花畑はどこにもなく、活気にあふれた市場の真ん中につつまっていた。

（今日は厄日かもしれません。）

家に帰ろうとすれば雨にたたられ、花畑にいきなり立たされ、今は知らない土地にいる。

もう、わけがわからなかった。夢なら早くさめてほしい……。

ここで、立ち話もなんだし、という少年の手に引かれ、牡丹はとあるお店の中に入った。

「おじちゃん！お茶二つ頂戴！」

カウンターの奥に少年は声をかけると、手近にあったいすに腰掛けた。

牡丹もそれにならう。

『知らない人についていってはいけません』、と座ったあとで兄の言葉を思い出したが、まあいっか、と思っただのは内緒だ。

「呉羽ケレハ！久しぶりだなあ、お、お譲ちゃんは初めましてだな。呉羽が女の子つれてくるなんて初めてだから、ここは奮発してやろう！」

人のよさそうなおじさんがてきぱきとお茶の用意をしている間、牡丹はお店の中を見渡した。

間接照明でちよつと薄暗い店内。

年季のはいつた家具や調度品。

中国茶専門店・・・小さな看板が目にとまる。

壁には大きめのガラスの器や茶色い木箱が、きれいにディスプレイされていた。

牡丹たちの前に出てきたのは、グラスに入った葉っぱの塊。

「これは丹桂飄香タンケイヒョウウカっていうお茶だよ。こうやってお湯をそそぐと・・・」

そういって、お湯をいれると、中から黄色い金木犀の花が次々と飛び出し次第に甘い香りがただよってきた。

「かわいいですう。」

うっとりとしたグラスの中身を牡丹は見つめると、おじさんは満足したようにカウンターの奥へと行ってしまった。

「落ち着いた？俺の名前は、さっきおじちゃんがいってたからもう知っているとと思うけど、『呉羽』。ねえちゃんは？」

「牡丹です。先ほどはありがとうございました。」

牡丹は深々とテーブルに手をつけ、頭を下げる。

「あ、頭なんて下げなくていいって！ちよ、早く顔上げてってば！」

ワタワタした声が聞こえたので、素直に顔をあげる。カウンターの  
おじさんはおかしそうにクスクス笑っていた。

## 第二話 暖かい出会いとおいしいお茶（後書き）

皆様は、「知らない人についてはいけません」ですよ。  
牡丹はもうちょっと危機管理能力を・・・ムニヤムニヤ

### 第三話 笑えるっていいよね

「ところでさ、何であんなところで座ってたの？危ないじゃん。」  
もつともな意見であるが、牡丹にも理由はわからない。

仕方がないので、雨に降られて家路を走っていたことから、いきなり花畑にたっていたこと、強風がふいたこと、あそこに座っていたこと、全部順をおって話してみた。

「ほえ、そりゃ、珍しい。黄色の花畑だなんて、誰かの結界だったかなあ？」

しかも、その花畑を結界と仮定して、また他の誰かがその結界つきやぶってねえちゃんをさらって、ここに置き去りにしたと。こりゃまたわけわかんねえな。」

いわれている牡丹がもつとわからない。

結界？つきやぶる？さらう？いったい何のことだろう。

「あ、ねえちゃん、わかっただけじゃないみたいだから、ぶっちゃけていうけど、ここってさ、ねえちゃんたちの世界でいう『あの世』ってとこなんだけど。」

は？

何をいつているんだ、この少年は、と牡丹は思った。自分は生きている。こうして、座っているし、話しているし、お茶も飲んで・・・

「死後の世界って、私、死んでいるんですか？」

「うん」

牡丹はおずおずと、呉羽に尋ねてみた。

「呉羽さんも死んでいるんですか？」

「うん」

「あのカウンターのおじさんも？」

「うん。俺なんて、多分ねえちゃんより歳うえだぜ？」

不思議と涙もでなかった。

そして、「冗談でしょ？」とにっこり笑って言うこともなぜだかできなかった。

「本当なら、三途の川って言われているところに、成仏して転生してまた人間界に戻るまで世話をする係りみたいなのがちゃんといっているだけだよ、

自分がいつ死んだかわかってなかったり、下界に未練がもんのすんごくあるヤツとかは、目の前にいる係りを見つけることが出来なくて、路頭に迷ったりするんだってさ。

三途の川で係りを見つけたやつは、そのまま船にのって、閻魔大王のところへ行く。

ここである程度の説明なり、尋問なりうけて、極楽、地獄に振り分けられるってのが、一般的。」

まあ、この程度の知識は持っていたので、牡丹は素直にうなずく。仮にも神社の娘だ。

本当に三途の川があったり、閻魔大王がいたりというのは正直驚いたが……

「この三途の川つてのが、色とりどりの花が咲き誇るめっちゃきれいなところなんだけど、たまーに、一色の花しかさかない場所に連れて行かれる時がある。」

この一色つてのが曲者で、死者の国、つまりはここなわけなんだけど、この国を治めている王様だけが使える、まあ、プライベート三途の川つていうの？そうゆうのがあるんだって。」

呉羽の話をどこまで信じてもいいものなのか、牡丹は迷った。

カウンターのおじさんをチラッと見ると、呉羽の話にウンウンとうなずいている。

どうも本当のことらしい。

三途の川に『プライベート』なものがあるのがちよつと引いてしまったが・・・

「ま、そんな迷ったヤツラをここまでひっぱってきてこの世界を案内して、慣れるまで世話するのが、俺の役目だったりするからさ、そこんとは気にしなくていいって。」

俺が案内してやったやつは皆イヤツだった。うん、俺って見所あるのかもなあ〜。

俺も怖くないっしょ？結構俺って、たよりになるぜえ〜」

一気にしゃべる呉羽に圧倒されながらも、牡丹は思わず噴出してしまった。そして二人で笑いあった。

牡丹は気づいているのだろうか、彼らが閻魔王の元についていないという事を。

このような街が形成されるくらい、迷える魂がうごめいているという事実を。

## 第四話 暗いからこそ輝く光

「っち！かつさわれた！」

周りの目も気にせず、大きな舌打ちをしたかと思うと、青年は荒っぽく椅子から立ち上った。

見事な銀色の長い髪を黒いヒモで結び上げ、黄色を基調としたその長い装束を翻しながら、大またでずかずかと外に向かって歩いていく。

あからさまな態度に執務室と呼ばれる部屋にいた者達が驚いた。

「白銀しろがね、何をそんなに苛いらついている？皆がおびえているではないか。」

白銀と呼ばれた青年を止めようと、一人の男性がそばへ寄った。

青を基調とした装束を身にまとった男性は、もう一度声をかけようと、1歩前に出た。

「……………孔雀、そこをどけ」

青い装束を着ている男性は孔雀くわんせうというらしい。

白銀は声を荒立てることはしなかったが、静かな分、余計に怖さがありました。

白銀は端正な顔立ちをしている割にニコリと笑いもせず、「冗談も言わない。」

（もったいないよなあ〜白銀のこの顔でやさしい言葉でもかけてやれば、国の女どもなど、よりどりみどりでらうに……………）  
孔雀はそう思うのだが、言葉にすると怒られるのでだまっていた。

しかし、いつも怖いヤツが今日は苛立ちを隠さずにいるのだから、怖さが倍増しているようなものだ。

気の弱い女官達など、柱の影に身を寄せ合い、自分が怒られるかのようにガクガクと震えている。あまりにもそれがかわいそうで、孔雀はもう一歩前にでて、白銀の歩みを止めようとした。

「ちょっとおゝ女官達が怖がってるじゃないのおゝ、いつも怖い白銀が今日は一段と怖いんじゃない？」

孔雀が何か言いかけた瞬間、後ろからすつとんきょうな声が出た。さつきまで怖がっていた女官達から黄色い歓声が聞こえてくる。

キヤーキヤー騒ぐ女官達にヒラヒラと手を振り、赤を基調とした装束を着た声の主は白銀の歩みを完全に止めることに成功した。

「紅玉（カズマキ）、助かった。一人じゃ白銀を止められそうにもなかった。」  
孔雀は大げさに安堵してみせた。

「白銀が怖いのはいつもだけどおゝここまで怒るってのは例がないわねえゝ？」  
何をそんなに急いでいるわけえゝ？」

白銀は紅玉をにらみつけた。にらまれた紅玉はいつものことなのか、平然としている。  
ヒノキで出来た扇をあごにあて、ちょこんと顔まで傾げて見せている。

しかし、その目はどちらも笑ってはいない。  
ちりちりと空気が震えた。

(こりゃあ〜白銀、相当ご立腹だな、しかも、公には出来ない内容で……)  
「はあ……、八尾<sup>やの</sup>、人払いを頼む」

孔雀はひとつため息をつき、部下に命じて女官達や書記官達を退出させた。

白銀が話しやすい環境をつくってあげるのと、女官、書記官が固まっていたのでは、今日の政務に支障をきたす恐れがあったからだ。

自分達以外のものが部屋から退出し終わったのを確認すると、白銀も少し落ち着きを取り戻したのか、手近な椅子にどっかりと座った。いつもは王族らしい振る舞いをする白銀のその行いに、孔雀と紅玉は内心驚きを隠せなかった。

「単刀直入に言おう。百花の王が攫われた。」

白銀のその言葉に一瞬の間を置いて、孔雀は2歩も3歩も後ずさりしそうになり、紅玉は反対に白銀を殴りそうになった。

「百花の王って、自分が何いつてるのかわかってるわけ?!」

「いちいち喚くな。これから取り戻しに行く。」

淡々と話す白銀に紅玉は怒りを隠せない。

扇を持つ手がワナワナと振るえ、その手は力の入れすぎで白くなってきた。

手にした扇がミシリと紅玉の力に耐えかねて悲鳴を上げる。

「攫われた前に、あんたが攫ってきたのね……」

孔雀は今にも白銀につかみかかろうとしている紅玉を必死で引き止めていた。

ここでこの二人が喧嘩でもしたら、この部屋ごと吹っ飛ばす恐れがある。普段穏やかな紅玉がここまで声を荒げているのだから、手加減なんてしそうもない。しばし考えて、やむなく孔雀はするすると紅玉を引きずって部屋の入り口へと向かうこととした。

「?!孔雀!離しなさいよ!白銀なんて一発なぐっておかないと、私の気が治まらないわあああああ!」  
一発じゃ、とつてい収まらないけどねええええ!と、騒ぎまくりだ。

どうしてそこまで紅玉が白銀に向かっていくのか孔雀は理解しかなかった。

だが、白銀には白銀の考えがあつてのことだ。自分が首をつっこんでいいものでもないと自分の勘がささやいている。

「俺には何のことだかさっぱりだが、白銀にも考えがあるんだろうよ。ちゃんと取り戻してこいよ。」  
それだけ言うと、まだわめいている紅玉を引きずりつつ、白銀と顔を合わせることなく後ろ手にひらひらと手を振ると部屋を出ていった。

紅玉と孔雀の姿が見えなくなったのを見届けると、白銀は左手を床にかざした。床の上に淡い光が浮かび上がり中から光が二筋出てきたかと思うと、見る間に二人の少女へと姿を変えた。

「四十七番ゲートを開け、我みずからが制裁してくれるわ。」  
小さく、二人の少女に命じると、扉が淡く光り、そして3人はその光の中へと入っていった。

#### 第四話 暗いからこそ輝く光（後書き）

とりあえず、きりのいいところまで頑張るぞ〜！  
おー！アヒヤ！！（・・）（・・）

## 第五話 知らないことは罪ではない…はず

「ここからちよつと行つたところに宮殿があるんだ。今は、金の王様の『白銀』様が他の4人の王様をとりまとめている。」

牡丹はあれから、死後の世界であるこの街の仕組みを呉羽から教わっていた。

「取りまとめている方のほかに4人つて、合計5人も王様がいるのですか？」

王様と聞くと、大体は1人で他は貴族とか、諸侯とか、騎士とか、そつゆう人たちがいるものだと思つていた。

「ここつて、牡丹ねえちゃんがいた世界とは性質全然違つから、あんまり考えこまないほうがいいとおもつぜ。」

そして、呉羽は面白そうに笑つ。おじさんにもここにこと笑つていた。

「他の4人つていうのは、青の王様『孔雀』様、黒の王様『黒耀』様、白の王様『琥珀』様、赤の王様『紅玉』様つてとこかな。まあ、あんまり下町にはお顔出さないけどな、見ればすぐにわかるとおもつ。5人も王様がいるから、んじゃ5人の中からトップをきめましようつてことで選ばれたのが白銀様らしいよ。」

王様の下には死者の管理をしている役人とか、外から攻め込まれた時の軍隊とか、まあ、牡丹ねえちゃんが考えているような役人は一通りそろつてる、一応国だしな。」

牡丹は、王様の名前を復唱していく。青、黒、白、赤、そして金。あ、と脳裏を掠めた言葉があつた。

「陰陽五行説ですか？」  
「正解」

呉羽は出来の良い生徒を褒めるようにパチパチと手をたたいている。

「ねえちゃんすげえな、俺が担当した新人で、王様のこと言っただけで五行説なんて単語がでたの、ねえちゃんが始めてだぜ！」

お世辞でも無く、本当に呉羽は牡丹を褒めた。

「うち、ちっちゃいけれど、神社だったんです。」

褒められて悪い気はしないが、牡丹はちょっと照れたように下を向いた。

「歳の離れたお兄ちゃんがいて、今は勉強のためにうちにはいないんだけど、ちっちゃい頃に、いろいろ教わったんです。お前もちゃんと勉強してお父さんの手伝いするんだぞって言われて。」

そこで牡丹は言葉を切った。もう手伝いたくても手伝えない。あいたくてもあえない。それが心の奥のほうからじわじわと沸いてきた。いつの間にやら目頭が熱くなってくる。

「呉羽さんって、詳しいんですね。でも、呉羽さんの話を聞く限り、王様がいらっしゃるのにぎわう街は『極楽』ということになるのでしょうか？」

それにしても、なんていうか庶民的すぎるというか……  
もつともな意見に、呉羽は「ああ」と微笑んだ。

「ん〜半分あたりで、半分間違い。当たり前っていうのは、俺がこの世界に詳しいこと、間違いつていうのは『ここが極楽』っていうこ

とね。」

ちなみに、ここの街は四十七番街っていうんだといって、お茶を一口飲んだ。

「極楽にいけるのは、生前、得をつんだ偉いものだけだよ。ここは、地獄に行くほど悪いこともしてなければ、極楽に行くほど得もつんでいない、中途半端なものが集まる街。

だけどさ、どんな世の中も、中途半端なやつのほうが絶対的多数なんだよね。

だから、ここまで大きくなっちゃったんだけど。

ここに居場所を見つけたやつはここに定住しているし、ここにいたくなければさっさと下界に転生すればいいっていう、自由な街だよ。

「いい例が、私だけどね、とカウンターのおじさんは笑った。

「俺は、ねえちゃんみたいにこの街に迷い込んできた人を、慣れるまで世話するのが仕事なんだ。」

ねえちゃんみたいな美人は初めてだけど・・・と照れたように呉羽ははにかんだ。

「お世話になります。」

牡丹はこの状況を受け入れ、早く慣れようと心に誓った。

早く慣れようとがんばった心が呉羽が言った矛盾を見つけられないのはした仕方がないのかもしれない・・・。

そして、にやりと笑ったあの笑顔の裏にあるものも。

第五話 知らないことは罪ではない…はず（後書き）

複線を回収できるか、自分でもわかりません！（マテ）

生暖かい目で見守っていただければ幸いです

ウアーン・・・（ノ）、（ノ）。。。（ナクナ

## 第六話 強い光は闇を際立たせるのに

「あ、だけど、気をつけてほしいことが1個あるんだ。」  
呉羽はまじめな顔にもどると、まっすぐに牡丹を見つめた。

「この王様たちに出会ってはいけない。存在自体消されるから。」

あまりにきつぱりと言い切るので、牡丹はその意味を把握するのに一瞬とまどった。

「え？だって、王様ですよ？この世界を治めているんですよ？何で出会っただけで存在を消されてしまうのですか？」

そこへ、おじさんがお茶のお変わりをもって、テーブルにやってきた。

「あの方たちほど、冷酷なものを見たことはないよ。」

増えすぎてしまったこの住人をよく思っていないしね。」

そろそろ街ごと地獄に落としてしまいたいんじゃないかな？」

治安は悪くないし、せっかくここに居場所を見つけて生活しているだけだから、私たちはそっとしておいてほしいんだけどね。」

悲しそうに笑うと、またカウンターへと戻っていった。

「突発的に死霊狩がはじまるんだ。王様たちはゲームだと思ってるんじゃないかな。」

俺たちのこと、人間扱いしてくれないんだ。」

「・・・狩られたヤツらはどうなったか知るよしもないけどね。戻ってこないから、消されたのかもしれない。」

俺、新しく迷い込んできた人たちを受け入れて、ここでの生活に慣れるまで世話しているんだ。だって、『仲間』は1人でも多いほうが楽しいじゃん！

だけど、それも今の状況じゃどこまで出来るかわかんない……」

だんだん下を向いて小さな声になっていく呉羽から牡丹は目を離すことができなかった。

自分も呉羽から助けてもらったことになるから。

もしかしたら、その死霊狩りにまきこまれていたかもしれないのだ。

「ごめん！話が暗くなっちゃった！でもさ、牡丹ねえちゃんには、この状況とか知ってほしかったんだ。」

牡丹は自分の状況を知って悲しくなった。そして呉羽に感謝した。自分の身を挺してかくまってくれたことがとてもうれしかったし頼りになった。

「呉羽さん、私は、呉羽さんに見つけていただけてよかったと思っています。」

呉羽さんがしてきたことは、決して無駄じゃないはずです。私はそう思います。」

牡丹がゆっくりいうと、呉羽はすこしはにかんで、そして『ありがとう』と小さくいった。

「ごめん、何かこれから生活しようっていう人に、暗い話しちゃったね！

そうだ、住む場所とかまだわかんないよね？住むところが決まるまで俺のうちにとまってもらっているんだけど、よかったらこれから案内……」

「それは必要ない。」

呉羽の言葉をさえぎって突然降って沸いた声に、牡丹は、はっと顔を上げた。

呉羽の後ろには背の高い人物が立ってる。

いつの間に来たんだらう？

お店の扉は開かれ、まぶしいほどの光が店内に差し込んでいた。

逆光になって、その人物の顔は見えなかったが、牡丹はなぜかカタカタと震えがとまらなかった。

「ねえちゃん！逃げろ！」

呉羽の声がやけに遠く感じる。

カウンターのおじさんの姿は見えなかった。

震える体を抑え、何とか立ち上がろうとすると、両脇からいきなり押さえ込まれた。

見れば、二人の少女に抱え込まれている。

そして、無言のまま、外へと引きずり出されてしまった。

「く！呉羽さん！呉羽さん！」

力の限りにもがくが、少女達の力は思いのほか強く、びくともしない。

「離してください！呉羽さんは何も知らない私を助けてくれただけなんです！」

必死に懇願するも、聞き入れてはくれないようだ、何度目かの抵抗をしようとしたとき、爆音とまばゆいばかりの閃光がお店からあふれ出した。

## 第七話 黄色は嫌い

「一人の女を連れ出すためだけに『白銀さま』自らがお出ましとはねえ。」

店内は見るも無残な姿にふつとばされてはいたが、『呉羽』の周りだけは何事もなかったかのようだった。

先ほどの人懐っこい笑顔はどこにもなく、人を馬鹿にしたような作った笑顔を貼り付けた『呉羽』がそこにいた。口調はさつきとは違ってかわって、とても威圧的である。

「ふん、傷ひとつつかんとは、そのくだらない身を守るために、何人の魂を犠牲にしておるのだ。お前がさつさとここから消えれば平和になるというのに。」

白銀はめんどくさそうに呉羽をにらみつけた。

「それをぶつとばした白銀さまが言うかねえ。消えた魂はあなたのその攻撃のせいで転生の機会を失われたんだって、気づいてる？」

ニヤニヤと呉羽は白銀を見あげる。

「俺はどっかの誰かさんが正式な手順をふまずに無理やりさらってきた可愛そうなお姫様を助けてやったただだけだぜえ？」

礼は言われることがあっても、怒られることしてないんですけどお

言い終わらないうちに、白銀の左手から光の弾が呉羽に向かって飛び出した。

ものすごい音と光が部屋からほとばしる。

「……ふん、白銀がそこまであせっているってことは、『あいつらの力が相当弱っているってことか？かよわい白銀ちゃんに免じて牡丹は預けておいておくけど。』  
手厚く接してあげてほしいなあ。」

呉羽は白銀からの攻撃を受けたにもかかわらず、またしてもかすり傷ひとつ負っていない。しかもクツクツと面白そうに笑っている。

「今日はやけに饒舌だな。」

「白銀に比べたら、誰でも饒舌の部類に入るって。んじゃ、あとで牡丹迎えに行くから、綺麗に着飾ってあげてよね！よろしく。」

呉羽はすちゃ！っと右手を上げた。

「ふん、返り討ちにしてくれるわ。」

白銀が一瞥すると、呉羽の周りには何匹もの死霊がむらがっているのが見えた。

「呉羽さん！おじさん！」

力の限り叫ぶ牡丹は、店から出てきたのが呉羽の後ろに立っていた人物だと気づき、愕然とした。

その人物以外、誰もいない。

先ほどは逆行でわからなかったが、黄色を基調とした装束を身にま

とつた青年だと確認できた。

今日は本当に『黄色』に縁がある日である。今までは大好きな色だったのに、嫌いになりそうだ。

さっきまでにぎやかだった街も、ひっそりと静まり返っている。

息をこらして、この光景をどこからか見ているのだろう。

私のせいなのだろうか、私がここにきてしまったから、呉羽さんやおじさんが消されてしまったのだろうか。

牡丹はハラハラと流れる涙を止めることはできなかった。

「準備ととのいましてございます。」

1人の少女が青年に道をゆずると、キラキラとまばゆい魔法陣が浮かんでいた。

「城へ戻る」

青年はまだ震えている牡丹の腕をつかむと、引きずるように魔法陣の中へと消えていった。

二人の少女は周りを警戒しつつ、魔法陣へと入っていく。

あとには、先ほどの活気のある市場は消え、死霊がうごめく廃墟だけが残っていた。

第七話 黄色は嫌い（後書き）

サブタイトルに頭を悩ませます。

悩ませるなら書かなきゃいいじゃんとも思います。

思っけていても直せない自分が憎い・・・今日この頃です。

5月5日は子どもの日

・・・柏餅くってない！（ソコカ！）

## 第八話 何度目かの願い

光を抜けると、そこは広々とした中庭だった。

歴史の教科書で見たことのあるような、中国風の東屋が中央に建ち、小川が流れ、小さい橋もかかっている。

いろいろな花が咲いているが、極彩色のものはほとんどなく、淡い色の小さな花が色とりどりの絨毯を連想させた。

ところどころに木が植えられ、気持ちよさそうな木陰を作り、小鳥たちが鳴き、小魚が小さな群れを成して泳ぎ、この世のものとは思えないとても美しい風景に、またしても時間がたつのも忘れてしまいうようなのだが

(ここって、この世じゃないんですよねえ)

と、牡丹は一人でパニックになっていた。

足は依然としてガクガク震えていたし、気を抜けばその場へたりこんでしまいそうだ。

両脇にはすっかり少女たちが張り付いているし、前には呉羽に攻撃をしたであろう人物もたっている。

ここから逃げ出すことは出来るだろうか。

しかしどう考えてもこの状況で逃げ出すこともできない。

たとえ逃げ出したとしても、ここはもう、この世ではない、と呉羽に言われているので、助けてくれる人もいないだろう。

青年が『城』といていたから、ここがそうなのだろうか。

牡丹は呉羽に言われた事を思い出していた。

『王様たちにあつたら存在自体消されるから』

呉羽の言葉が牡丹の中でグルグルと回っていた。

願わくはこの人が『王様』ではありませんように……。

第八話 何度目かの願い（後書き）

短っ！（。。；；。。）

今回短いですね（自分でイウナ・・・）

きりのいいところでくぎったら、こんな短い文章になってしまいました。

（しかも、説明だらけという読みづらいものに・・・おう）

がんばれ、私・・・

## 第九話 朱に交われば紅

「……ま……牡丹様！」

気づけば、両腕を少女たちが片方ずつ持ち、牡丹はがくがくとゆすられていた。

少女たちは心配そうに牡丹の顔を覗き込んでいる。

「やはり『カソウ』にいらっしやっただせいで、牡丹様の『キ』が安定しておりません！」

一人が悲痛な声を出すと、

「白銀様！牡丹様をお部屋におつれいたしますわ！」  
もう一人がそれに続く。

「依存はございませぬわね?!」

二人の少女が青年…白銀に向かってまくし立てる。これではどちらが主人か分からない。

「よきに」

と、一言だけ発する。

「承知奉りました!」

二人の少女は牡丹なら舌をかみそうなセリフをこともなげにいいはなち、牡丹の腕をつかんでいる手にさらに力を込めた。  
しかし、彼らの会話の言葉に牡丹は顔を真っ青にしていた。

『白銀さま』……『金の王様の「白銀」様』……『王様たちに  
あつたら存在自体消されるから』

消されてしまう！

呉羽の言葉を思い出し、タガタと足だけではなく全身が勝手に震え  
だした。

「……の……私……けされ……ちやうの？」

牡丹は両目に涙をため、白銀を見あげた。

牡丹の腕をつかんでいた少女たちは「ぎょっ」として、白銀を見る。  
白銀はというと、ツカツカと牡丹に歩み寄ると、壊れ物をあつかう  
ようにそつと頬をはさみ、上を向かせると、いきなり有無を言わさ  
ずに深く口付けた。

牡丹は恐ろしさでぎゅっと目を瞑る。

瞑った瞬間に涙がパタパタと音をたてて流れていった。

「お前の存在を消そうとするヤツラがいたら、真っ先にそいつらを  
殺してくれよう」

低く耳に心地よい声が振ってくる、くるりときびすを返し、去っ  
ていった。

とりあえず、消されることはないらしい。

荒くなった息を整え、ほつとしたのもつかの間、先ほどの口付けを  
思い出し、牡丹はみるみる顔を朱に染めていった。

(き・・・キスなんて、初めてなのに・・・うわぁうわぁですう！！！！)  
今にも顔から湯気がでそうな牡丹を二人の少女はニコニコしながら見上げていた。

「牡丹様にお怪我をさせるようなヤツは私がけちよんけちよんにしてやりますわ！」

「そうですね！牡丹様は何も心配なさることはございません！」

なぜ、自分が『様』付けで呼ばれるのか、新たな疑問がうかんだがとりあえず、ありがとう、と小さくお礼をいった。

「私、牡丹様のお世話をおおせつかりました、なすな齋と、すみれこちらは董と申します！」

「一生懸命お世話させていただきます！」

お礼を言われた二人はうれしそうに言うと、牡丹の両脇に立って、部屋へ案内したのだった。

## 第十話 顔をあげて

通された部屋の中は、白檀のお香がたかかれているらしく、とてもいい香りがしていた。

全体的にアジアンテイストの部屋は赤系統の家具や小物で彩られているが、少しの嫌味も無く、とても落ち着いた雰囲気だった。

天蓋つきのフカフカのベッド、細かく彫刻がされた鏡台や、テーブル、窓の外にはちよつとしたバルコニーが取り付けてあって、そこからさつきとはまた別の庭が見えた。

日の光が存分に差し込み、落ち着ける空間になっている。

「ささ、お疲れのところ申し訳ございませんが、謁見がございましたので、お着替えをお願いいたします。」

齋に手を引かれ、温泉かと思えるような浴室に通される。

「謁見？」

全身をくまなく泡で包み込まれ、わっしやわっしやと髪を洗われ、牡丹はくすぐつたいような声を出して聞いてみた。

「さようございます。このお城には白銀様のほかに4人の王様がおりますので、その方々にお会いしていただきます。」

先ほど、白銀様もおっしゃっていましたが、牡丹様に害をなす方はここにはいらっしやいませんし、もし仮に、そのような不屈き者が現れましたら、私がお守りいたします。安心してくださいませ。」

お湯をかけられ、さっぱりすると、やっと気分も落ち着いてきた。体を拭き、部屋へと戻ると、大量の衣装やら宝飾品が並べられ、董があーでもない、こーでもないと言頭を悩ませていた。

「牡丹様！腕によりをかけますので、ご安心を！」

何に対して安心すればいいのかわからなかったが、ここはとりあえず、「お願いします」とだけいつておいた。

牡丹はマネキンのように突っ立ち、なずなの指示通り動く。

チャイナドレスをもっと凝ったような、世界史の教科書でみた中国王朝のお姫様たちが着ていたような服は淡いピンクで統一され、牡丹は繊細な刺繍に見とれていた。

鏡台の前に牡丹を座らせると、櫛と簪、リボンを使って器用に結わえていく。

あっという間に、一人のお姫様が完成した。

「ま・・・馬子にも衣装ですう。」

思わずつぶやくと、薺と董に思いつきり否定されてしまった。

「さ、皆様がお待ちです。お疲れのところ申し訳ございません。皆様方への謁見がおわりましたら、何か暖かい飲み物でもご用意いたしますね。」

二人の対応はあくまでやさしかった。

長いすそを踏まないように、細心の注意をはらい、ゆっくりと長い廊下を歩いていく。

しばらくすると、両脇を兵士に守られた大きな扉が見えてきた。

「百花ひゃっか、齋ひゃっかが参りました。王にお目通り願います。」

「同じく百花、董とうが参りました。王にお目通り願います。」

二人が兵士にいうと、ゆっくりと扉が開く。

扉の奥は薄暗く、ろうそくの炎がゆらゆらとゆらめいていた。

牡丹は何て声をかけたらいいものやらわからなかったので、とりあえず兵士たちにペコリとお辞儀をして、部屋の中へと入っていった。

3人が部屋に入ると、ギギギと重い音をたて、扉が閉じられる。

完全に閉まったのを確認したかのように、部屋の中が明るくてさらされた。

部屋の中はとにかく広い。

従姉妹の結婚式の時にいった、ホテルの大広間よりも広いかもしれない。

そんなことを考えつつ、齋と董に先導され、部屋の中央へと進む。

そこには、大きなテーブルに腰掛けた5人と、5人を囲むように20人ほどが牡丹へと視線を向けている。

ここに、牡丹に害をなすものはいないと聞かされてはいても、手の震えはとまらなかった。

そんな自分を叱責するように、震える手をぎゅっと握り締め、うっむく顔を無理やりあげた。

## 第十話 顔をあげて（後書き）

やっと白銀以外の王様が出てきました（といっても、椅子に座っているだけ・・・）

もう少し話が進んだら、どわああああと登場人物が増えます。はい、自分で自分の首を絞めております。

ぎゅちぎちです（マテ）

王様の後ろにいる20人ほどの人物はただの兵士とかお役人さまなので、この人たちではないです。

自分の設定集を見て、どこをけずろうか悩んでおりますですよ。勝手にキャラクターが動いてくれることを期待します！

馬犬 目 ぼ・・・（マ）。。\*（

## 第十一話 王様との面会

「きゃ〜 牡丹ちゃんかわいいわあ〜！」

急に発せられた言葉にビクッと牡丹は反応してしまっ

椅子に座っているところを見ると、この人も王様なのかもしれない。

薺と董は優雅に一礼すると、さっさと、白銀の後ろについてしまっ  
た。

一人おろおろとしていると、こっちこっちと手招きをされた。

しかたがないので、牡丹は手招きされた人のところへと向かう。

「牡丹ちゃんは桃色が似合うわね その簪もかわいいわ 私の見立  
ても捨てたもんじゃないわね！」

大き目の扇で口元を隠し、にこやかに笑っている。

声はハスキーだが、よく通り、『男装の麗人』といったほうがしっ  
くりくる。

（綺麗な人ですう、目の保養ですう）

美術館の名画をみているような、うつとりとしたまなざしで牡丹が  
見つめていると、ふわっふわの金髪を無造作に束ねたその人は満面  
の笑みをかえしてきた。

「あ、私はこの国の王の一人『紅玉』（こうぎよく）っていうの、  
よろしくね

ついでに、中央でふんぞり返っているのが『白銀』で、その隣から  
順番に『黒耀』（こくよう）、『孔雀』（くじゃく）、そして、あ

のちんちくりんが『琥珀』（こはく）」

笑顔を向けられて牡丹は思わず赤面してしまう。

「んだと紅玉！俺はまだ成長期だつてんだろ！」

紅玉の適当な紹介に、最後の『琥珀』がキレても、紅玉はフンと鼻を鳴らしたただけだった。

「……空木、間違いないな？」

中央の玉座に座っている白銀の声に牡丹は身体をこわばらせた。

ギギギと効果音がつきそうな動作で声のしたほうを向く。

白銀は椅子に深くこしかけ、長い足を組んでこちらを見据えていた。

消される事はないと聞かされてはいても、呉羽の言葉がぐるぐると頭の中をまわっている。

そうでなくとも目の前でお店がふつとばされるさまを目の辺りにしているのだ。

紅玉と琥珀の漫才（？）でホワホワしていた気持ちが一気に下降する。

一度刷り込まれた『恐怖』は簡単にさつてくれるとは思えない。

「……はい、百花のお一人『椿』様のご息女、牡丹様に間違いござ

「いません。」

牡丹は聞き覚えのある名前にピクリと身体を振るわせた。



目深にかぶったフードをはずしながら、空木は牡丹に微笑みかけた。肩のラインで切りそろえられたピンクのふわふわウェーブの髪を茶色のリボンが彩っている。

歳は7〜8歳くらいだろうか。

ニコニコと笑う感じがどこか呉羽に似ていた。

「これで違うって言われたら、泣くに泣けないわよね。」

紅玉がボソリとつぶやく。

白銀に促され、牡丹は空いている席に腰掛けた。

「あ、あの、牡丹と申します。なにぶん、わからない事だらけです。皆様にご迷惑おかけいたしますが、何卒、よろしくお願いいたします。」

そして、ペこりと頭を下げる。

王様に対して、こんな挨拶でいいのかわからなかったが、以外にも、よろしく〜と気軽な声が返ってきて、牡丹はほっと胸をなでおろした。

顔を上げると、紅玉が出来のいいわが子を見るような目で牡丹を見ていた。

「つかあ〜！賢いわ！ステキだわ！かわいすぎるわ！さすが私の牡丹ちゃん！

琥珀！手を出したら殺すわよ！」

「だから、何で俺なんだよ！」

ピシッと扇を突きつけられ、琥珀はまたしても、紅玉をにらんだ。牡丹はあわあわとうろたえるばかりである。

「まあまあ、牡丹さんがおろおろしているから、じゃれるのもそのくらいにね。」

うん。さて、先ほど、紅玉から適当に紹介されてしまったけどね、私は『黒耀』（こくよう）、ここでは、白銀の参謀っていうのかな。補佐的役割をしているよ。

隣の『孔雀』は、武器の扱いに長けていてね。下層で暴動とか起ると、彼がやつつけてくれるんだ。

孔雀の隣の『琥珀』はね、んゝ突っ込み担当？」

「黒耀！てめえもか！」

「ね、こんな感じ。」

そして、にっこりと笑う。

牡丹は「はあ」とあいまいに返事をするだけにとどめた。

### 第十三話 王様との面会3

「何か聞きたいことは？」  
おもむろに白銀が口を開く。

先ほどのこともあつてか、牡丹は恥ずかしさと気まずさで下を向いてしまった。

「し〜ろ〜があ〜ねえ〜！きたばかりの牡丹ちゃんを脅してどうするのよ！」

齋！董！私が許す！やっつけておしまいなさい！」

一人、ぶんすかと怒る紅玉に、二人はにっこりと笑って、「無理です」と声をそろえていった。

そんなやりとりを綺麗に無視し、空木と呼ばれた少女が牡丹の隣までやってきた。

「突然お連れして申し訳ございませんでした。

時間がいけませんので、白銀様とご相談し、このような形を取らせていただきました。途中、邪魔が入ってしまい、牡丹様にご心配とご不安を与えてしまいましたこと、心よりお詫び申し上げます。」「

空木に深々とお辞儀をされたので、牡丹もつられてお辞儀をした。

「牡丹様のいた世界では、牡丹様の痕跡は私が責任をもって消去してまいりましたので、残されてきたご家族、ご友人等のことでしたら、何も気にかけることはございません。」「

あどけない顔でにっこり笑われ、牡丹は返す言葉も見つからなかつ

た。

(私の痕跡を消去?)

牡丹はいわれている意味が理解できなくて、ポカンと空木の顔を見た。

「さつき、空木から牡丹ちゃんのお母さんの『椿』が百花ひゃっかつていわれたから気づいているかとは思っただけだね、牡丹ちゃんって、もともと『こつち側』の住人だったの。」

本当は『こつち側』で育てる予定だったんだけど、ほら、そこは『大人の事情』ってやつがあつて無理だったのね。」

もともと『こつち側』の住人だから、『あつち側』で生まれて生活してきた痕跡を記憶や記録から消すのって、とっても簡単なの。まあ、最初からあつちにはいないことになっているからね。」

でも中には特殊な人がいてね、本来ならば、『こつち側』の住人である牡丹ちゃんがいなくなれば、自然に【記録】なんかは消えるんだけど、【記憶】をとどめてしまふ人がいるのよ。それを消してくるのが、空木たちが所属する集団なの。まあ、仕事はそれだけじゃないんだけどね(笑)空木はそのトップってわけ。」

別にこの人数なのだから、コソコソ話をする必要もないし、会話は丸聞こえなのだが、紅玉は楽しんでいるようである。

牡丹はあっち、こつちで話が片付けられそうになっているのを聞いて混乱していた。しかも、牡丹は自分は死んだのではなく、もともと「死者の国」の住人であるという。

「空木いゝ、本当にこいつが6番目の王なわけ？」  
琥珀が空木に疑いのまなざしをむける。

その声に、牡丹はびくりと肩を震わせた。  
ちらりと琥珀を見れば、胡散臭そうにこつちを睨んでいた。  
はつきりいってオーラが怖い。

「琥珀様（怒）」  
空木がにっこりと琥珀に微笑みかけるが目が笑っていなかった。

「ちょっと、琥珀！私の牡丹ちゃんを睨まないでよね！」  
空木に無言の圧力をかけられ、紅玉には反対に睨み返され、琥珀は  
でかかった言葉を飲み込んだ。

#### 第十四話 王様との面会4

「・・・あ、あの、お言葉に甘えさせていただきまして、質問してもよろしいでしょうか？」

牡丹が遠慮気味にたずねると、いつせいに視線が牡丹にあつまった。人払いがされており、限られた人数しかいないとわかっていはいても、人前に出るのが苦手な牡丹には、あまり気持ちのいいものではなかった。

黒耀がどうぞ、と笑顔でいつてくれたことにわずかばかり安堵し、ひとつ深呼吸をする。

「さ、先ほど『琥珀』様がおっしゃっておられましたが、わ、私がその、『6番目の王』というのは、えと、どうゆうことなのでしょうか。」

最後の方は緊張のしすぎで小さくフェードアウトしてしまっただが、とりあえず、質問の意味は理解してくれたようで、どこかしこから「ああ」と、声が聞こえた。

（こんなのに『様』は余計だわ、と隣から声がしたようですが、とりあえず、聞かなかったことにしましょう・・・）

「すみません、琥珀様が空気を読まずにおっしゃるものですから、牡丹様にいらぬご不安を与えてしまいましたね。」

空木のあまりのいいように、琥珀はぐつと言葉に詰まった。言い返そうとしているのだが、言葉はソフトでも、全然笑っていない目を向けられ、あさってのほうを向いてしまう。

「王様の説明はおいおい白銀様がしてくださると思います。ここでいえるのは、牡丹様がその王の一員になられた、ということだけなのです。」

申し訳ございませんと謝る空木の言葉に、白銀が嫌な顔をした。

「空木、逃げやがったな」

ボソリと琥珀がつぶやいたが、幸いにも、誰にも聞こえていないようだった。

「そうよねえ、いきなり引つ張り込まれて『あなたの痕跡は消したから、心配しないで。王様就任おめでとう』って言われても、ピンとこないわよねえ。」

紅玉が扇をパチパチならしながら言った。

まったく、紅玉の言うとおりである。何がなんだかさっぱりだ。

「こつちは前々から牡丹ちゃんを王様にして、仲良く暮らしているこつねっていう考えがあったから、約1名を除いて違和感ぜんぜんないのよねえ〜」

じつとりと紅玉に睨まれて、琥珀は視線をそらした。

「別に、いい、悪いの問題じゃねえよ！

ただ、【記録】も【記憶】も【獣】もない【ナナシ】に王としての

重圧に耐えられるのかって心配になっただけだろうが……！」

いらだたしげに叫べば、スコン！と小気味のいい音が部屋に響き渡った。

「ん〜琥珀のいう事もわかるんだけどね、ここでいっていいことと、悪いことがあるってことだけは、覚えとけ、餓鬼が。」

紅玉が右手を優雅に前に出し、左の袖で口元を隠しながら満面の笑みをたたえている。

言葉遣いはアレだけど……

そして、琥珀を見れば、額をおさえ、机に突っ伏している。

どうやら、紅玉が持っていた扇が琥珀の額にクリーンヒットしたらしい。

牡丹はその様子にあんぐりと、空いた口がふさがらなかった。

「あらあらあら、牡丹ちゃん、いろいろひっぱりまわされて疲れたんじゃない？お部屋に戻る？」

そんな牡丹を紅玉が心配そうに覗き込んできた。

確かに、いろいろありすぎて、休みたかったが、だからといって自分から退出するのは躊躇われた。

「ふむ、牡丹ご苦労だった、部屋に戻り休むがいい。」

白銀がいうと、音もなく薺と董が部屋にはいつてくるところだった。牡丹は白銀の言葉に甘え、退出させてもらうことにした。

## 第十五話 黒い滝

ここでの作法とか全然わからなかったが、深々と礼をして立ち去ろうとしたとき、突然天井から爆音が響いた。

「何事ですか?!」

「お怪我は?!」

爆音に驚き、何事かと役人たちが部屋に駆け込んできたが、その役人たちを孔雀が左手を動かすことで制止させる。

一同の視線は穴の開いた天井を見ていた。

もうもうと立ち込める煙の向こうから、逆光をあびた黒い影が現れる。

「わははははは！みんなそろっているな？期待にこたえて俺様参上！」

高笑いのもと、「とうっ！」という掛け声とともに、黒い影が舞い降りた。

一緒に天井から破片がパラパラと小気味良い音をたてながら落ちてくる。

影が降り立ったのを確認するように死霊達が滝のように空いた穴からなだれこんできた。

その様子を王達は苦虫を噛み潰したような顔で見つめていた。

あっけにとられている牡丹はいつの間にもやら、その影に抱きかかえられていた。

「うんうん 牡丹、かわいくしてもらったね ちよっとお化粧もしたんだ？かわいい子って、なにしても似合うけど、牡丹は本当にかわいいねえ」

その声に聞き覚えがあつた牡丹は後ろを振り返る。

「呉羽……さん？」

牡丹をだっこしているのは、あの光の中で死んだと思っていた呉羽だった。

「よかつた…生きてたんだあ…」

最後のほうは涙でかすれてしまったが、何だか様子がおかしい。

( 呉羽さんってこんなに背がたかかったかしら？ )

最初に出会ったとき、呉羽は15歳くらいの少年に見えた。

だけど、今は身長やら胸板の厚さやらは20歳を越えているように見える。

死者の国だし、自分よりも年上だといっていたから、自分の容姿を変えることなど、朝飯まえのことなのだろう…多分。

牡丹があれやこれやと考えをめぐらせていると、

「……あのときいったはずだ。振り返ちにくれと。」

白銀がゆっくりと椅子から立ち上がり、左手を前につきだす。

その動作に反応してか、呉羽と牡丹の周りに死霊がむらかった。まるで二人を守るように、

自らを攻撃にさらすように。

「ちよつと白銀まで！それはやめろ！牡丹にあたったらどうする？」

孔雀のあわてようを見て、牡丹は震えた。

今やろつとしているのは、呉羽さんに放ったあの一撃かもしれない！

牡丹は思わず呉羽にしがみついた。

(さっきのききき…キスと言葉は嘘だったのですかあゝ号泣)

白銀が攻撃の態勢に入っても呉羽は平然としている。

「孔雀うゝ白銀の攻撃なんて、俺にあたらないつてゝ。

しかも、この檻こわれて、俺はお姫様つれて逃げるけどね

だからいいよ、白銀。むしろ俺はその攻撃大歓迎」

そして、挑発的な笑みを白銀にむけた。

(は？檻？？？)

こわごとと周りを見れば、大きな鳥かごのようなものの中に自分が入っていた。

正確には、呉羽と牡丹の二人がであるが。

( いったいいつの間に?! )

「白銀え、攻撃しないなら、こつちからいくけどお〜？  
つて事で、死霊さん達、やっつけちゃって」

ニコニコと呉羽がいえば、二人にまとわりついてた死霊の群れが、  
檻をすり抜け、王達や駆けつけてきた役人たちに襲い掛かった。

ひとつひとつはたいした事はないが、あまりにも数が多すぎる。

王達がイライラしはじめたのを見ると、呉羽は牡丹をキュッと抱き  
しめた。

「呉羽！ やっぱりお前は消える！！！」  
死霊を消しながら、紅玉が吠えた。

「あはははははは、牡丹、白銀たちが本気出さないうちに、俺そろ  
そろ逃げるわ またね」

そして牡丹のほっぺに「チュ」っとキスをすると、音もなく呉羽は  
消えたが、

連動して紅玉がキレた・・・

怒りに任せて術をぶつ放す。

逃げ遅れた役人たちが何名か巻き込まれたようで、わーとかきゃー  
とか悲鳴が聞こえたが、それでも紅玉の怒りは収まらない。

一番やっつけたいヤツが消えてしまったので、消化不良をおこして

いるようだ。

半分以上八つ当たりだ。

思い当たる高位魔法をありったけの魔力をのせて放つ。

「いいかげんにしろ！」

と、琥珀に後ろからまわし蹴りを首筋にいれられ意識を手放すまで紅玉の攻撃は続いた。

紅玉のおかげで死霊も消え去ったが、部屋も木っ端微塵に消え去っていた。

「やっぱり幻影だったか……」

黒耀があごに手をかけながら一人うんうんと納得しているのを孔雀はあきれた目でみていた。

紅玉の攻撃がやんだのを確認すると、緊張が抜けたのか牡丹はへなへなとその場に座り込んでしまった。鳥かごのような檻も消えている。

埃まみれにはなってしまったが、どこにも怪我はないようだ。

いったい、今日は何なのだ……

「牡丹、立てるか？」

白銀が牡丹に手を差し出す。

その白銀を見て、牡丹は涙がとまらなかった。

## 第十六話 気に入らないもの

「ちょっと！白銀は私の牡丹ちゃんつれてどこいったのよお  
！」

紅玉は、気を失って倒れてしまった牡丹を白銀がどこかへ連れて行ったのを、呆然とみていた自分に腹が立っていた。

「確かに、一番牡丹ちゃんの近くにいたのは白銀だけど！この私に断りもなく連れて行くのは許せないわ！場所が特定できないだけに余計に腹立たしいわ！」

そんな紅玉を孔雀は困った顔で、黒耀はおもしろそうに、琥珀はうさんくさそうに見ていた。

「何がそんなに気に入らんわけ？」

琥珀の一言で紅玉は琥珀に詰め寄った。

「気に入らないことだらけだからこんな荒れてんですけど？！それとも、琥珀ちゃんが牡丹ちゃんを取り戻してきてくれるわけ？！」

私の牡丹ちゅあんがああああ！

これ以上つつついたら、紅玉が暴れだしかねない。

琥珀はてきとうに返事をする、部屋から出て行くこととした。

「琥珀は牡丹さんの事が気にいらないうだね。」

黒耀が独り言のようにつぶやくのを琥珀が聞き逃すわけもなかった。

「はあ？気に入らないとか、気に入ったとかいう問題じゃねえだろ？『椿』殿の娘で、正式な手順ではなかったにせよ、白銀が『百花の王』として連れてきたんだ。その事は変えようも無い事実だし、俺にとつては『王』が増えたつてだけで別になんとも思っちゃいねえよ。」

ああ、あえていつなら面倒くさいやつが来たなって感じだな。」

黒耀はこぶしで口元を隠しながらクツクツと笑っている。

「黒耀、てめえ、何がしたい？」

いぶかしげに琥珀が黒耀を睨みつけた。

「気に入らなくても、気になってはいるのですね。なるほど、『椿』殿の娘だからですか。」

琥珀にしては合格点を差し上げましょう」

「黒耀、てめえこそ何たくらんでいやがる。」

つていつても答える気はねえよな？これだから策士つて奴は嫌いなんだ。」

ぶつくさといいながら琥珀は部屋を出て行った。

「……だそうですよ、紅玉、どうしますか？」

おもしろそうに黒耀が言う。

紅玉は何をいまさら、というような顔つきで琥珀が出て行った先を腰に手をあててみている。

「百花の姫達が誰かの手に渡ろうとも、『椿』だけは誰にも渡さないわ、たとえそれが琥珀であつてもね。」

黒耀は軽くうなずき、それでは私も仕事にもどりますと部屋を出て

行った。

「・・・黒耀、本当ならばあなたが一番『花』を必要としているの  
にね」

紅玉の言葉は誰もいない部屋に静に消えた。

## 第十六話 気に入らないもの（後書き）

（16・5話）

「・・・さあつて、私もお仕事しなくっちゃ！」

がんばるわよー！と気合を入れてこぶしを振り上げると、ガシッとその腕をつかまれた。

心なしか、腕がみしみしといているような???

「おりよ？」

「『おりよ』じゃねえよ。」

振り返れば、孔雀が役人たちを連れて、紅玉に笑いかけていた。

「孔雀うゝ、腕が痛いわ」

「痛くしてるつもりだから、痛くなかったら医者に診てもらえ。」

そしてまたにつこりと笑う。

「私、Mじゃないわよ？」

「俺もSじゃねえよ？」

どこまでもかみ合わない話に紅玉も満面の笑みでかえす。

「離せ、この馬鹿力が（怒）」

「離れたら逃げるだろうが、この破壊魔が（怒）」

そこでようやく孔雀のいわんとした事に思い当たり、ははんと鼻を

ならした。

「私の攻撃で壊れちゃうようなヤワな建物つくってんじゃないわよって、大工にいつておくといいわ」

「お前の攻撃は、象が砂山を壊すようなもんなんだよ。自覚しろっての、っていうか、お前が直せ。もちろん、修理費用はお前もちな？」

「んな！か弱い乙女に大工仕事をしろっていうの？！

なんで王が後片付けしなくちゃならないのよ！って金もか？！」

「てめえが『乙女』とかいうな。きもちわりい。んじゃ、あとよろしくな」

孔雀が去っていくと、代わりに役人達に囲まれた。

手に手に、いったいいつ作成したのか、備品やら、修理代の見積もりの束が握られている。

こんなときの仕事も速いって、どんだけうちの役人達は優秀なのよ。

と一人で突っ込みを入れてもむなしいだけだ。

役人達はここぞとばかりに紅玉に群がってくる。

「冗談じゃないわよおおおお！」

天井に開いた穴に紅玉の悲鳴が吸い込まれていった。

## 第十七話　ぬくもりを感じて（前書き）

1話にするにはおちゃらけた（？）文章になるし、かといって削除すると私がかなくなるので、あとがきに「0・5話」として載せる事にしました。

改定するまでこの様式でやってみようと思いますです。

## 第十七話　ぬくもりを感じて

身体がふわふわとういているような感じがする。  
まぶたが重く、開ける事ができない。

暗闇に一人取り残されたようだが、不安は無かった。

幼い頃、母に抱っこされてあやされているような、そんな感じ。

自分にはもういないはずの存在を求めてしまうのは、寂しいからだろうか？

お母さん

ぬくもりを感じて、無意識にしがみつく。

暗闇が少しあかるくなり、ゆるゆると重いまぶたを開ければ、目の前には黄色い花畑が・・・

「お前はよく泣くやつだな」

そして頭上から声がした。

まだぼおっとしている頭を無理やり覚醒させる。

花畑かと思ったのは、見事なまでの花の刺繍であり、しがみついていたのは、衣装の袖口だった。

黄色い衣装、ぶっきらぼうなこの声・・・

勢いよく起き上がったが、立ちくらみがしてそのままフラフラとへたり込む。

チラリと、声の主を見れば、不思議そうな顔で見下ろされていた。

「・・・申し訳、ごいませんでした」

今にも消え入りそうな声で牡丹は声の主、白銀に頭をさげた。気を失っていたとはいえ、一番偉い王様の膝枕で、しかも涙を流してしがみついていたのだ。

恥ずかしさと、不安と、恐怖とぐちゃぐちゃに入り乱れた思考で牡丹は誤ることしかできなかつた。

「謝る事は無い、今日あれだけあつたのだ、精神が参らないほうがおかしい」

白銀にしては穏やかな口調だったのだが、牡丹にそれが分かるわけでもなく、いつそう身構えてしまった。

牡丹を見て、白銀は小さなため息をついた。

この様子を紅玉が見ていたら、有無を言わずに俺になぐりかかってくるだろう。

そんな場面が思い浮かばれ、もう一度ため息をついた。

白銀は、牡丹を立たせると、左手を地面にかざす。

すると淡い光のなかから、齋と董が現れた。

牡丹は今まで泣いていた事もすっかり忘れ、その光景に見とれていた。た。

かざした左手の下の地面がぼうつと光り、光のすじが2本出てきたかと思うと、2人の少女へと変化したのだ。

驚きと尊敬の眼差しで、白銀を見つめる。

白銀や齋、董は牡丹が何に驚いているのか見当もつかなかったが、齋がいち早くわれにかえつた。

「牡丹さまあゝ！わたくしどもが不甲斐ないばかりに、お命を危険にさらしてしまい、もうしわけございませんでしたあゝ！」

地面に膝をつき、つつぷしてしまった齋を董がかばい、目で牡丹に懇願している。

牡丹はどうしていいか分からず、白銀に助けを求めた。

「仮にも護衛する立場の者が、目の前で守るべき主人を危険にさらしたのだ。それ相当の処分をせねばなるまい」

あまりに淡々と言い放つ白銀に牡丹は首をぶんぶん横に振った。

「あ……あの！処分はしないで下さい！わ、私がこんなこと言える立場ではないのは重々承知しているのですが、お願いします！」

怖かったが、なずな、すみれと白銀の間に割って入った。

震える足を両手で押さえつけ、深々と頭を下げる。

「ならば、監督不行き届きということで、お前が処分を受けるか？」

今度こそ、本当に目の前が真っ暗になった。だが、間に入ってしまった以上、今更逃げるわけにはいかない。

「う……それも出来れば、やめていただきたいです。

あ、でも、白銀様のお立場というものを考えれば、おとがめなしとこのもダメなんですよね、多分。

えと、その、お手柔らかに願いたいです……」

甘いか、わがままとか言われればそれまでだが、思わずはつきり言ってしまった。

その返事に白銀は思わず苦笑した。

「しょうがないな。お前達の主人がこういつているのだ。

・・・しかし、1人で怒っている俺が阿呆みたいだな。」

「ええええええ！あの！そんなつもりはちっともなかったのですが・  
・ごめんなさい！ごめんなさいい！」

よほど白銀のツボに入ったのだろうか、まだ笑いをかみ殺していた。

その様子に齋と董は固まっていた。

牡丹が自分達の事をかばってくれたのはものすごくうれしかった。  
何かしら処分を受ける事は覚悟していた。

しかし、王に人払いをされ、部屋から追い出されてしまったのだから仕方がないとも思えるのが、今の2人にはそんな考えなど浮かびもしなかった。

ただただ、主人である牡丹を危険にさらしてしまったことのみ反省しきりだった。

・・・のだが、あの白銀様が笑っていらっしやる・・・

そのことが反省とか償いとか自分達がなんで怒られていて、牡丹にかばわれているのかということも忘れてしまいそうになる。

そして、体の奥があつたかくなるような、そんな感じに初めてなつた二人は顔を見合わせ心から笑いあつた。

## 第十七話　ぬくもりを感じて（後書き）

（17・5話）

あの白銀が笑ったというのはあつという間に宮殿中の噂になった。なぜかは分からないが、紅玉は鼻高々で闊歩し、他の王は何か悪いことがおこる前触れではないかと、頭をかかえている。

「さすが牡丹ちゃんよねえ〜 初日から大物っぷりを遺憾なく発揮しているわね」

ルンルンと、それこそスキップでもしそうな勢いで紅玉は牡丹の部屋へと入っていった。

「牡丹ちゅああああん ごっきげんいっかつがあ〜」

牡丹はなずながいれてくれたお茶を飲んでいるところだった。

「紅華玉麗王様、いらっしやいませ。」

「本日は柘榴様とはご一緒ではないのですか？」

齊と董が膝を折る最敬礼の姿勢をとり、牡丹はワタワタと椅子から立ち上がって礼をした。

その初々しさが紅玉にはとてもほほえましかった。

「ああ、そんなかたつくるしい礼はやらなくてもいいっていつてるじゃない。柘榴はおいてきたわ。私だって一人でゆうゆうと宮殿内を歩いてみたいわよお。」

紅玉はご機嫌だ。

牡丹はというと、どうすればいいのか困ったようだ。

「牡丹ちゃん、私の事は『紅玉』って呼んでいいからね  
そうねえ、抵抗があるなら『紅玉姐様』って呼んでくれてもかまわ  
なくってよ」

「紅玉様、その呼び方は他の王達から何といわれますか！」「  
はつきりあせているのが見て取れたが、紅玉はおかまいなしだ。

王様の一人である紅玉と自分の世話をすると張り切っている二人の  
立場を考えると、どっちのいうことを聞いておくべきか、という疑  
問は愚問というものだ。

「えと・・・わかりました、紅玉姐様・・・」

この言葉に紅玉は小躍りし、なずなとすみれは深いため息をついた。

「柘榴については今度紹介するわね

それより牡丹ちゃん、いきなりこっちに連れてこられて大変だった  
わね。

白銀には私からきつちりと説教しておくから、許してやってね。  
許すも何も、こっちにきてしまったものは仕方がない。」

牡丹はにっこりとうなずいた。

紅玉はなぜかそんな牡丹の様子を見て目頭を押さえている。

「なんて素直でいい子に育ってくれたのかしら！あっちの父上母上  
グッジョブよ！」

なずなとすみれが止めに入らなければ窓に駆け寄り外に向かって叫

びそつな勢いだ。

牡丹はあっけにとられながら「あはははは」と乾いた笑いでごまかした。

「今日はいろいろあって疲れたでしょう。」

私の部屋はここからちよつと遠いだけけれど、いつでも遊びにきてちよつだい。

それじゃ、ゆつくりやすんでね。明日、またお伺いするわ。」

半時ほど、たわいのないおしゃべりをして紅玉は戻っていった。

「はい、おやすみなさい、紅玉姐様。」

部屋の入り口までお見送りにでると、まだ紅玉は目頭を押さえていた。

本当にいろいろあった1日だった。肉体的にどうか、精神的に疲れた。

でも、明日になれば、何かわかる気がする。

根拠はないが、そう思えた。

( 17・5話 了 )

## 第十八話 一番星見つけた

その人にあつたのは、もうすぐお日様が西の空に沈む頃。

茜色に輝く空の下で、血で染め上げたような赤い着物を着崩し、ちらりと見える肩は細く、白く、烏の濡れ羽色の長い髪とのコントラストが一枚の絵画を思わせた。

牡丹と目が合うと、少したれ気味の目が怪しく微笑みかける。

「こんばんは、新しい子ね。ここにいるっていうことは、もうあの方には抱かれたのかしら？」

そして、さも可笑しそうにクスクスと笑った。

その人のいう『あの方』とは、誰のことだろうか。

しかも、いきなり『抱かれた』などと、何をいつているのだろう。いぶかしげに、その人を見ると、またクスクスと笑った。

「あらあなた、何も知らないのね。ここがどんなところなのか、この住人が何を意味するのもかも。

知ろうとしているの？それとも気づかないふりをしているの？

それとも、あの方が甘やかしているのかしら？」

そうだったら、ちょっと嫉妬しちゃうわね、と、着物の袖口をそつとあごの下にもって行き、かわいらしく小首をかしげてみせる。どこか白々しいそのしぐさに薄ら寒いものを感じた。

「私は、桜の『白妙』（しろたえ）。やっと『紫雲』（しうん）が

消えて、私が一番になったのに、いつの間にかまた二番になっちゃたのよね。

あなた、百花の王が誰になったのか、知っているかしら？」

「しうん？」

「ああ、あなた、新人さんだものね、ごめんなさい。

紫雲っていうのは、王の側近みたいなことをやっていた姫で、王がいなくなった後は、王の代理をやっていたの。

この水晶宮を束ねていた厭味な女なのよ。

紫雲がやっと消えてくれて、私が一番になったっていつの間に、いつの間にかまた二番になっているのよ。嫌になるわ。」

かわいらしく言うてはいるが、目は笑っていないかった。

もし、牡丹が『百花の王』だと知ったら、この白妙はどうするのだろう。

聞かなくても答えはわかりそうなものだったが、聞かずにはいられなかった。

「もし、王が現れたら、あなたはどうするのですか？」

牡丹の問いに白妙は満面の笑みを牡丹へと向けた。

「そうね、紫雲のように消えてもらうしかないわね。」

牡丹はいたたまれなくなって、自分の部屋へと走っていた。

今まで生きてきた中で、一番早く走った気がした。

白妙の笑い声が耳から離れない。

誰もいない長い廊下。

茜色の空がだんだん薄い藍色となり、一番星がキラキラと輝く。後ろを振り返ると、格段に大きく見える月が、ここはお前が生きていた世界ではないと、拒絶しているように見えた。

走ったせいの汗なのか、先ほどの言葉を思い出しての冷や汗なのか、牡丹は額の汗をそっとぬぐった。

もう少しで自分の部屋につく手前、牡丹は廊下の欄干にもたれかかり、体の中に溜まったものを吐き出すように、大きく息をついた。

「そつえば、あなたの名前、聞いていなかったわ。教えてくださる?」

すぐ耳元で白妙の声が聞こえて、牡丹はガバツと振り返った。息が顔にかかりそうなほど近くに、白妙がいた。

「?!」

「ねえ、お名前、教えてくださる?」

しかし、白妙の問いが終わらぬうちに、白妙は目に見えぬ力で、牡丹から引き剥がされ、壁に叩きつけられた。

驚く白妙と牡丹の間に、白妙の着物よりも鮮やかな『紅』が割り込んでいた。

「まったく、どいつもこいつも、私の許可無くこの子にちょっかいかけやがって・・・」

不機嫌極まりないという声色に、牡丹は荒く息をしながら、その背中を見つめた。

「ほんつとにむかつくわね!白妙!ぶつとばす!」

腰に手をあて、紅玉は、愛用の扇をピシッと壁にはりついている白妙に突き出した。

「・・・もう、ぶつとばしてるじゃねえか。」

牡丹の頭上からこれまた不機嫌そうな声がした。

立てるか？とへたり込んでいる牡丹に手を差し出したのは琥珀だった。

珍しいこともあるもんだと、牡丹はボケつと琥珀を見つめていたが、そんな琥珀に紅玉が振り返り、白妙にしたように扇を突き出した。

「琥珀もぶつとばす！」

「何で俺がてめえにぶつとばされなきゃ、ならねんだよ！」

「私の牡丹ちゃんに汚い手で触るんじゃないわよ！馬鹿が移る！」

「はあ〜?! てめえの方が馬鹿だろうが！馬鹿に馬鹿っていわれるすじあいねえな！」

「私はいいのよ！『牡丹ちゃん』馬鹿だから！」

「意味わかんねえよ！」

牡丹は二人の間でオロオロとするしかなかった。

つてゆうか、その間白妙は？

「その、力なきものが『牡丹』ですって?! ありえないわ! なんて『ナナシ』が『王』なんですか?!」

乱れた髪の毛を直しもせず、わなわなと肩を震わせて白妙は牡丹を睨みつけた。

また、『ナナシ』だ・・・

牡丹はがっくりと肩を落とした。

「牡丹ちゃんは牡丹ちゃんだから『牡丹』なのよ！お前、頭わるいんじゃないの?!」

紅玉の言葉に、「てめの頭のほうが悪いわ」と琥珀がつぶやいたのを、牡丹は聞かなかったことにしといた。

ってゆうか、どうでもいいけど、まだ息が苦しい。

紅玉と琥珀のおかげで、白妙のプレッシャーは幾分やわらいだが、まだ牡丹をジワジワと追い詰めてた。

が、突然ふつとそのプレッシャーが消えた。

「・・・だまれ、お前等の馬鹿でかい声で『宮』が崩れる。」

そして、度派手な轟音があたりに鳴り響く。

モウモウとする煙が消えると牡丹の部屋の隣からきれいさっぱり崩れ落ち、中庭が丸見えになっている。

「・・・あ、一番星みーっけ」

後ろのほうで声があったが、多分、あのホワホワした蛩だろうか。

いつの間にやら牡丹は白銀の腕の中におさまっていることに気がついた。

(ってゆうか、白銀様、御自らが破壊しておりますが・・・というつつこみはこの際、スルーしたほうがいいのでしょうかあ)

牡丹の私室の前に、琥珀、紅玉、白銀と三人の王が並ぶとは、見よ  
うによつては不思議な光景である。

タイミングが良すぎるともつしましようか・・・

「白銀が一番馬鹿だ！！！」

どうやら、皆の意見が一致したらしい。

閑話休題 『礼儀作法』 1 (前書き)

この閑話休題で、あの方の正体が暴露されます！  
いい意味で期待を裏切れたらなあと思います。

閑話休題 『礼儀作法』 1

「紅玉、貴様、牡丹に何を吹き込みやがった」

突然執務室に地獄をはうような低く、それでいてどこまでも通るような声が響いた。

声はこの執務室の主である白銀なのだが、確実に10度以上部屋の温度が下がったようである。

執務室の中央に置かれた机に陣取っていた王達以外の官吏や女官達は、誰が人払いしたわけでもないのだが、クモの子を散らすようにいつせいに部屋から退出してしまった。

\*\*\*\*\*

「紅玉姐様、礼儀作法を教えてください。」

牡丹がそう言い出したのは、この世界に来て1ヶ月程たった時の事だった。

「齋さんも、董さんも、私は王様だから、礼儀作法なんて必要ないっていうんです。」

「ただ、ここで生きていくためっていうか、最低限のマナーだけでも覚えておかないと、自分がみつともなく見えると思って・・・」

紅玉は小首をかしげながら、齋と董をちらりと見やった。

確かに二人のいうとおり、牡丹はこの世界の頂点である王の中の1人であるのだから、別にこれといった礼儀作法などなく、適当に接していればいいはずなのだが、と考えるから、何かいい案でも思いついたのか、牡丹にっこりと微笑みかけた。

「・・・そうね、二人の言うこともわかるけど、牡丹ちゃんの言うことももつともだわね。簡単なものだったらいくつかあるから、教えてあげてもいいわ」

その言葉に牡丹は喜んでいたが、素直に喜べないのは、牡丹の側近である齋と董である。

王様の中で一番腹黒いと自他共に認める紅玉の事。牡丹にとんでもない事を教えそうでかなり怖い。

そんな二人の不穏な空気を察したのか、くるりと、紅玉が二人に向き直った。

「そうゆう事だから、二人にはちょっと私のお仕事を手伝ってほしいんだけど」

王様の仕事と聞いて、二人は緊張した面持ちで紅玉を見た。

「そんなに難しいことじゃないの。ほら、この間、牡丹ちゃんの大事なお顔に傷をつけた大ばか者がいるでしょう？今日は他のヤツラと一緒にこっちに来ることになっているから、適当に転がしておいてほしいのよ」

にっこり笑ってこともなげにいつてはいるが、わかりやすく訳すと「牡丹の顔に怪我を負わせた紅玉の臣下である柘榴を袋叩きにしてしまえ」ということのようにだ。

まあ、実行してもいいのだが（マテ）弱いものいじめは良くないの（え）適当に「訓練」とでもいって、相手してもらおう、と二人は考えた。

これなら、戦ったことに違いはないし、多少ボコボコにしてもいい

わけもたつだろう。

牡丹の身が心配だが、王様の命令は絶対なので、体よく追い出されたとはいは毛の先ほども感じずに二人は思いっきり後ろ髪をひかれる思いではあったが、牡丹の部屋をあとにするしかなかった。

\*\*\*\*\*

牡丹は紅玉に教わった作法を部屋で反復練習していた。

薺と董が嫌そうな顔をしていたので、何かとてつもなく難しいことでもあるのかと思っただが、教わってみると、意外と簡単だった。

イメージ的には、テレビドラマとかでやる古代中国の役人がやっていたような、ひざをおり、頭を下げる礼だった。

「そして、最後になつこり笑えば完璧・・・ということでしたが、笑えますでしょうか？」

牡丹は姿見に顔を近づけ、につこり笑う練習もしてみた。

しかし、どうもほっぺたがひきつってみえるような気がする・・・

「ん、実際に誰かにやってみて、間違いを直してもらった方がいいのかもしれない・・・」

牡丹が何回か練習をしていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「牡丹様、失礼いたします。白銀様がお見えです。」

董が扉をあけ、うやうやしく礼をすると（牡丹もそんなのがしたい！）といていたのだが、却下されていたのだ）、白銀が部屋に入ってきた。

これは習ったことを試すチャンスかもしれない！

牡丹はタタタつと白銀に走りより、紅玉に教えられたとおり、完璧に礼をとってみせた。

「何か御用ですか、白銀様。」

そして、につこり、これまた完璧に微笑んでみせた。

・・・のだが

「牡丹、誰に教わった？」

帰ってきたのは絶対零度の声。

しかもかなりご機嫌斜めのように、牡丹は笑顔を凍りつかせた。齋と董にいたっては、とんでもないものを見てしまったかのように口をポカンと開けて牡丹の事を見つめていた（魂はどっかに抜け落ちたみたいだ）

「あ、あの、何かお作法間違っておりますでしょうか？」

突然の冷たい言葉に、牡丹は今にも泣き出しそうになっている。

白銀はひとつため息をつく、もう一度牡丹に聞いた。

「誰にそれを教わったと聞いている。」

見るまでもなく怒りMAXである。牡丹はカタカタと小さく震えていた。

「・・・紅玉様です」

そして、消え入りそうな声でそれだけつぶやいた。

牡丹の耳に白銀の舌打ちが聞こえた。

「・・・牡丹は部屋で待っている、手土産に紅玉のなきがらを持ってきてやる。」

「x ?!?!」

くるりときびすを返すと、白銀は足早に牡丹の部屋をあとにした。涙でうるんだ牡丹の目には、白銀の後ろにどす黒いオーラが炎のよ

うに煌めいているように見えた。

閑話休題 『礼儀作法』 2

そして、最初に戻るわけだが・・・

「え、紅玉、何やらかしたのさ？」

琥珀が嫌なものでも見るように眉をひそめ、紅玉を見た。

「牡丹ちゃん、完璧だったでしょう？何事にも一生懸命だから、教えるほうも楽しいわ」

紅玉は、白銀ににらまれようが、琥珀にけなされようが、どこ吹く風で、扇をもてあそびながら、ニヤニヤ笑っている。

「とりあえず、白銀は落ち着きなさい。紅玉もこれでは私どもは話が見えないせいで、白銀に援護すればいいのか、紅玉に援護すればいいのかわからぬではないか。」

黒耀は白銀を定位置に座らせると、紅玉をやんわりたしなめた。

紅玉は予想通りの展開に面白くてしかたがなかった。

「んっふっふ、牡丹ちゃんがね、『ここで生きていくために、最低限のルールは知っておきたいから、礼儀作法を教えて』っていうからね。」

「いらねーだろ、そんなの、めんどくせえ」

琥珀は投げやりにいった。

「こらこら、琥珀。それで、紅玉は何を教えたんですか？」

黒耀にうながされた紅玉は扇をぱちんと音をたてて閉めると、満面の笑みで答えた。

「胡蝶の礼を教えたわ」

白銀は思いつきり舌打ちをし、孔雀と琥珀はほぼ同時にお茶をふい

た。

「あら、いやねえ〜孔雀も琥珀も汚いじゃない〜」

本当に嫌そうな顔をし、紅玉はそでで顔を覆うと、扇でパタパタと二人を扇いだ。

黒耀にいたっては、ぽかんと口を開けている。

いつも冷静な黒耀も、この紅玉の爆弾発言には本当に驚いたようだ。

「×……………つうゲホツ！ゲホ！なんておいし……………えげつな！」

琥珀は白銀にらまれ、言いかけた言葉を訂正した。

孔雀にいたっては、目もあわせない。

「……………確かに、白銀が怒るのも無理はないかと思えます。」

黒耀は静かに紅玉を見た。

見られた紅玉は、ぷくっと頬をふくらませ、あさつてのほうを向いている。

「だって、疲れて帰ってきてさ、あのかわいい牡丹ちゃんが挨拶して出迎えてくれるなら、疲れもふつとぶと思わない？」

「だからといって、よりによって、『胡蝶』を教えることはないと思いますよ。」

紅玉は、牡丹さんを、『楼閣』にでも入れる気ですか?!」

黒耀は怒りを通り越して、あきれているようだ。

いつものにこやかな笑顔はどこにもなかった。

「まったく、紅玉もすごいこと考えるよな……………『胡蝶』ってあれだろ？娼婦が、自分を抱く客に向かってやる礼だろ？これからかわいがってね みたいな。」

「しかもよりによってこの馬鹿は、牡丹に自分の事を『姐さま』と

呼ばせていやがる。」

白銀の一言で、紅玉以外の全員が頭を抱えた。

「自分の娘に『姐』と呼ばせる『父親』がどこにいる?!」

「んまつ！琥珀に心配されなくてもここにいるわよ！」

「開き直るな馬鹿！」

「……しかも、娼婦の礼儀作法を娘に教える父親もどうかと思うが。」

特大のため息を孔雀はついたが、紅玉はニヤニヤと笑っているだけだ。

付き合いきれなくなったのか、白銀はおもむろに立ち上がった。

「どこへ?」

黒耀はそつと白銀に声をかけた。

「……牡丹のところへいつてくる。牡丹には紅玉のなきがらを土産に持っていくと約束したからな。謝ってくるさ。」

「ちよつと！さらりとひどいこといってんじゃないわよ！」

紅玉の怒鳴り声を無視し、白銀は牡丹の部屋へといってしまった。

「・・・紅玉、父親うんぬんは置いて、本当においしいことしてるよなあ」

完全に白銀の気配が消えてから、琥珀がぼそつとつぶやいた。

「まったくです。牡丹さんに『胡蝶』の礼をとられた白銀の狼狽振りが目につかぶようです。」

そして、黒耀がくつくつとおかしそうに笑った。

「ふうんだ、結局、みんな私の味方じゃないの。さっきまではあんなに白銀の肩を持っていたくせに、嫌になるわね!」

黒耀とは逆に、紅玉は面白くなさそうである。

「しかたないさ、ああでもいわなきや、今頃本当に六王（りくおう）牡丹の事です）の前に、紅玉の死体が転がっていることになっていたかもな。」

「確かに、紅玉どころか、俺らも巻き添え食ってふつとばされてたかもねえ」

孔雀の意見に、琥珀もうなずく。

「教えておいてなんだけど、牡丹ちゃん、すっごく完璧にやろうと一生懸命だったのよ。初々しくて、かわいくて、本当に、食べちゃいたいくらいだったわあ」

紅玉は左手を頬にあて、うつとりと思い返しているようだ。

「やめとけ、紅玉がいうと、しゃれに聞こえんって。」

つつくかさ、あの様子だと白銀、この後、六王の事食っちゃいそうだけど、お父さんとしてはいいの?」

孔雀のもっともな意見に全員がピタッと動作を止める。

しかし、それは一瞬のことだったが。

「ま、いまさらだよな?」

「いまさらですね。」

「お父さんが許しまあ〜っす」

「てめえはだまつてる（怒）」

にこやかに笑顔をかわす3人についていけず、琥珀は紅玉をにらみつけた。

牡丹が紅玉の正体を知るのもうちよつと先のお話。

閑話休題 『礼儀作法』

了

閑話休題 『礼儀作法』 2 (後書き)

はい、紅玉の正体暴露です。

牡丹の実(？)父親です。お母さんは『椿』さんです。

そのうち出てきます(お)

まだ正体を暴露されていない方がいるので、ころあいをみて出そう  
と思っておりますが、いい意味で期待を裏切れればいいなあと思ってお  
りますです。

## 第十九話 目覚めの悪い朝

さあ、宴をはじめよう

漆黒の空にきらめきを

絶望した者の前には心地よい闇を

永遠の安らぎを

贅を

魂を

私の前に引きずり出すがいい

「?!」

がばりと起き上がり、肩で息をする。

髪の毛は汗で顔にはりつき、脂汗がその細いあごから流れ落ちた。

「・・・っはあ、っはあ」

ぐるりを見回し、見慣れた部屋に安心してか、起きたのとは逆に布団に倒れこむ。

右腕を額にのせるととても冷たかった。

外からは柔らかい朝日が部屋の中にはいつてきている。

牡丹は一度、大きく深呼吸した。

「朝ですう……………」

体の中から嫌なものが全部出ることを願って、二度、三度と呼吸を繰り返す。

「おはようございます。牡丹様！」  
トントンと扉がたたかれると、こちらの返事もまたずに元気よく齋とすみれが入ってきた。

けだるい体を無理やり起こし、何事もなかったかのように微笑みかえす。

「おはようございますっ」

どこか疑った目で二人には見られてしまったが、気が付かないふりをした。

私のせいで心配をかけるわけにはいかない。

なぜかそんなことを思ってしまう。

「牡丹様、ゆつくり休まれてはいないようですね。」  
不意にすみれに声をかけられ、牡丹はびくりと肩を震わせた。

「・・・ちよつと夢見が悪かったみたいです。大丈夫ですよ。」  
パタパタと手を振りながらいうと、二人はぎよつとしたように立ちすくんだ。

「?!…大丈夫ではございません。」  
きっぱりといわれ、牡丹は目をぱちくりとした。

「大丈夫ではございませんわ、牡丹様。」

ああ、なんていうことでしょう！

この水晶宮は王様がたと花姫達がゆつくりとお休みになられるように創られた宮殿でございます。

ですから、警備等はもちろんのこと、夢にいたつても安心できるよう、一種の結界がはっております。その結界をかいくぐり、花姫、しかも百花の王であらせませす牡丹様の夢を荒らすなど、万死に値すべきことにはございませす。」

すみれはそこまでいうと、ぐつと拳に力をこめた。

「かくなる上は、その夢を荒らした輩が判明し、とっつかまえ、極刑にするまで、牡丹様の寢室を白銀様のところに移動させてはいかがでしょうか?！」

「・・・は?・・・え・・・ × \* ?！」

齋もうんうんと力強くうなずいている。

どこをどう解釈したら、そうなるのか牡丹はわからなかったが、牡丹はブンブンと顔をふり、手をふり、腕をふり、全身で拒否した。

(あの白銀様と寢室が一緒ですみれちゃん!自分が何いつてるかわかってるのですかあ?!)

あまりのことに耳まで真っ赤になっている。

「あ…あのね!すみれちゃん!ほ…本当に大丈夫なんだから!」

必死になって止めるものだから、すみれと齋は大げさに落ち込んだ。

「……………わかりました。牡丹様がそうおっしゃるのなら、寢室を移動いたしますのは、ほんの少し先にのばさせていただきます。しかし、その夢の件は白銀様にご報告させていただきます。これは水晶宮にとって一大事のことです。」

いつかは一緒にする気なんだ…、思わずがっくりとうなだれてしまった。

「さしでがましいようですが、どのような夢でございました?」  
齋が牡丹の顔を覗き込みながらたずねた。

「えっと……………あれ?ごめんなさい、忘れちゃったみたい。」

まあ、そうでしょうね。と、すみれがつぶやいたようだが、気のせいだろうか。

「誰かに呼ばれているような気がしたんだけど。」

とても怖かったっていうのは覚えているの。本当にごめんなさい、私の一言で、こんなに迷惑かけちゃって。」

いわなきやよかったと牡丹は思った。

ゆるゆると豪華なベッドから抜け出し、齊に手伝ってもらいながら服を着る。

その間にすみれが朝食のセッティングをしていたようで、隣の部屋からいい匂いがただよってきていた。

「それでは、牡丹様、また後でお迎えにまいりますので。」

齊とすみれが立ち去った後、牡丹は広い部屋の真ん中でぽつんと突っ立っていた。

第十九話 目覚めの悪い朝（後書き）

えっと、話の流れを考えて、ちょっといじりました。

すみません（（（；。 （（（ガクガクブルブル

内容は変わっていません。

順番を変えてみました。

先月の私にいいたい。

どうしたんだ？！…………と。

## 第二十話 5人の訪問者

暇だ・・・

暇すぎる・・・

暇だと感じるくらい、心に余裕ができたのはうれしいことだったが、これではあまりにもやるのが、というか、自分にできることが何もない。

薺と董は朝起きた牡丹の着替えや髪セットを終えると、白銀の仕事を手伝いにいつてしまった(らしい)。

広い城の中をあるけば、たちどころに迷子になるのは目に見えている。

ただでさえ、自分はよそ者なのだ。

迷子になっては、また迷惑をかけるにきまっている。

紅玉には部屋に遊びに来てもいいとはいわれはいたが、王の私室にホイホイいくのもどうかと思うし、かといって他に誰か知り合いがいるわけでもなく、ただ一人、ぬくい日差しをあびて、ポケーっとたっているだけなのだ。

「お日様はぬくいですう」

声に出していつてみる。

そうでもしなければ、あまりの暇さで倒れてしまいそうだった。

そう思っていたとき、ふいに扉を叩く音が聞こえた。

自分にお客様とは珍しいこともあるものだ。

「齋さん？董さん？」

小首をかしげ、扉に向かって声をかけてみるが、返事はない。

齋と董は、こちらが声をかけなくても勝手にあけて入ってくるから、二人ではないらしい。

牡丹は小走りで扉へといき、「今、あけます」と声をかけたが、

「なんだ、誰もいねえじゃねえか。」

という声を、壁と、扉の間で聞いた。

ベタなコントでもこんな展開はめったに見ない。

牡丹はいきなり開いた扉に思いつきり額と鼻をぶつけ、勢いの衰えない扉におされると、見事にふつとばされ、壁と扉の間にはさまれてしまったのだった。

目からは星が飛び出し、まだちかちかと瞬いている。

あまりの痛さに視界がぼやけた。

「<sup>めんどくせえ</sup>、誰もいねえぞ。つたく、徒勞におわつちまったじゃねえか。めんどくせえ。」

そんな声が開け放たれた扉のむこうから降ってくる。

牡丹はまだ、床にへたりこんだままだった。

「ここにいますう・・・」

痛む額と鼻をを両手でさすりながら、涙ながらに訴えると、やっと声に気づいたのか、扉がしまり、あわあわと牡丹の部屋に人がなだれ込んだ。

「<sup>柘榴</sup>のアホ！馬鹿力の脳みそ筋肉やろうがいきなり扉開けるって、どうゆう神経してんのよ！」

「んだと?!ちんくしゃ霞かすみにいわれたかねえな!  
この俺様があげてやっただけ感謝しやがれ!」

牡丹の前に座って、怒鳴っているのが1人。

その後ろで苦笑しているのが2人。

腕を組み、ふんぞり返って怒鳴っているのが1人。

先ほどの牡丹のようにポケーと立っているのが1人。

まだ痛みの引かぬ額をなでながら、牡丹はそれだけ確認できた。

「大丈夫ですう、何か御用ですか?」

顔をあげると、まだくらくらと世界がまわっていたので、断りを入れてから、牡丹は座ったままたずねた。

5人の訪問者の中で、後ろでポケーっとたっていた1人がすつと優雅に、牡丹の前に座る。

「こんなに大勢でおしかけてしまいました、ご無礼をお許しくださ  
いませ。」

私どもは……」

「螢ほたる、お前の主だつて、『ナナシ』の事はよく思っていないんだろ、  
何でそんなに下手にでるかねえ……つたく、『ナナシ』の分際で『  
王様』かよ。平和になつちまったもんだ……」

そこまでいい終わらないうちに、牡丹の前からその男の人が消えた。  
消えたというか、ぶつとばされた?

部屋の奥にあるガラス窓がこなごなに砕け、カーテンがバタバタと  
翻っている。

「誰の許可を得て、私の牡丹ちゃんにちょっかいかけているのかし

らねえ！」

汚いものでも見るように、窓の外をその人は眺めていた。  
牡丹以外は深く礼をしている。

「……紅玉姐様」

牡丹が声をかけると、満面の笑みをたたえて紅玉は牡丹の元へと歩み寄ってきた。

そして、

「牡丹ちゃん、おは……。ヨ……私の牡丹ちゃんのお顔に傷があゝ?!」

と鼓膜を破きそうな大音量が牡丹の部屋に響いたのだった。

半分なみだ目になりながら紅玉は牡丹の顔をのぞきこんだ。

「痛い痛いの外でくたばっている野郎にとんでけえ〜！」  
と、牡丹の額をなでた。

そんなもんで、この痛さがひくか!と思ったが、痛さどころか、傷まできれいに直っていた。

恐るべし、死者の国の王様……

そんな王様の一人が自分だなどと、考えたくもなかったが……

「……で、私のかわいい牡丹ちゃんの部屋に『主』の許可無く上がりこんだあげく、牡丹ちゃんに怪我をさせるという恐ろしい計画をたてたのは、どこの馬鹿かしら?」

眼も声も一片の笑いを含ませず、紅玉は一団を睨み付けた。

「紅華玉麗王様に申し上げます。」

牡丹様にお怪我を負わせてしまったことに関しては想定外とはいえ、お詫びもうしあげます。私どもは新しい王にご挨拶だけでもと思い

まして、水晶宮にはせ参じたのでありますが、取次ぎの女官も侍女もおりませんでしたので、このように勝手かとは思いましたが、お部屋にお邪魔させていただきました。」

「ながつたらしい釈明はいららないわ。『雪花』お前が言い出したのね？」

「失礼いたしました。この話を持ち出し、計画いたしましたのは、窓の外でのびている『馬鹿犬』にございます。」

と、雪花と呼ばれた女性は平然と喋った。

ううわあ、このおねえさんも容赦ないわあ

さっきまでお日様のぬくい部屋にいたはずなのに、いつ極寒になったのだろうと思うくらい、牡丹は二人のやり取りを体をガタガタ言わせながらみつめていた。

二人の間には自分には見えないが、ブリザードが吹き抜けているに違いない。

「よくぞいった、雪花。傷をつけた責任は犬に負わせるが、お前たちも止めなかったことに対する罰はあたえるからね。」

「仰せのままに」

紅玉の言葉に、雪花以下、全員が頭を下げる。

「・・・牡丹ちゃん、痛かったでしょう？」

やっと通常(?)に戻り、牡丹に笑いかけてきた紅玉に、ブンブンと音がしそつなくらい首を左右に振った。

そして紅玉は、これからお仕置きしなくちゃ と、楽しそうに部屋から出て行った。

紅玉に続き、残りの4人も部屋から出て行く。  
牡丹は一人、割れた窓ガラスを見つめていた。

## 第二十一話 野に咲く花

「本当に白銀って大事なところで役にたたないわねえ」

執務室に入るなり、紅玉は白銀に向かっていった。

中央の椅子に座り、両脇に高く詰まれた書類に目を通していた白銀は、紅玉のほうに見向きもしない。

「…っはあ、こればかりは私の責任の方が重いから先に謝っておくわね。」

牡丹ちゃんに怪我させちゃった。」

一瞬の間を置いて、執務室の温度が5度ほど下がったような気がした。

しかし、まだ白銀は紅玉のほうに見向きもしない。

「だから先に謝るっていったじゃない。綺麗に直したわよ。牡丹ちゃんの顔に傷なんて考えたくもないわ。」

今度はいつきに10度ほど下がったようだった。

遠くの方では女官や官吏達がくしゃみをしたり、腕をさすったりしているのが見えた。

声は聞こえずともこの殺気を感じ取っているのだろう。

「今から牡丹ちゃんの部屋にいつでも遅いわよ。」

「ただ、薔薇姫の影響がこんなところで邪魔をするなんてね……」  
そして紅玉は寂しそうに笑った。

「かなり悪いほうに進んでいるな。牡丹の夢が荒らされたらしい。念入りに結界を張ったつもりだが、相手のほうが何手も先にいてあざ笑っているような感じが気に入らん。」

やっと手をとめ、紅玉の方をむきながら、白銀はため息をついた。紅玉は目を見張ったが、前のように飛び掛ることはしなかった。

「齋とすみれから今朝報告があつてな。夢の内容は本人も忘れているらしいが、衰弱の度合いがひどいらしい。すみれは牡丹の寝室を俺の部屋に移してはどうかと提案したそうだが、すぐさま却下されたそうだ。」

白銀はそこでちょっと口の端をあげた。紅玉はというと、複雑な顔をしている。

「まあ、『結界』に関してはそれが一番安全策よね。  
(牡丹ちゃんの『貞操』に関しては一番危険だけど……)」

しかし、牡丹ちゃんつきのすみれだっけ？白銀にそこまで進言するなんて、考えて見ればものすごい子よね…感心するわ。」

誰かがそういえばいつていた。

この世界に『雑草』という植物は無い』と。  
董も齋も一般的には『雑草』と一括りにされる存在ではある。

だが、温室の中で人の手を借り、自分で受粉もできないような見栄えだけの『花』ではないのだ。  
白銀はそれを知っている。  
だからあえて『牡丹』に付けた。

「ま、あいつらには私から説教しておくわ。白銀のこの『雪花』もいたけど、一緒にやっちゃっていいわよね？っていうか、拒否権ないからね！」

「説教だったら、黒耀の方が得意だと思うのだが。お前じゃ雪花を筆頭に、言うこと聞くやつがいるか？」

「……ムリじゃね？」

いつの間にもやら、琥珀がそばまできていた。

白銀に書類の束を渡し、近くの椅子に座る。

「っていうか、もう黒耀が説教してる。紅玉の出番なし。」

「いちいち言い方がむかつくわね。」

「本当のことだろ。」

キツと紅玉に睨みをきかすと、白銀の机の上から違う書類の束を引き寄せた。

パラパラとめくりながら、めんどくさそうにため息をつく。

「あ、そうそう、六王が『ナナシ』ってなんだ、ってだれかれかまわず聞きまくってるらしいから、誰か教えてやったら？」

琥珀の言葉は、その場にいたものの動きを止めるのに十分だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2349/>

---

降るなら綺麗な華がいい

2010年10月10日22時37分発行